

『義経記』 江田源三の最後の部分の現代語訳

判官(源義経)が、

「大丈夫か皆の者よ」

と申せば、源三(江田広基)が息絶え絶えに申すには、

「ご不審(「勘当」)をお受けしましたが、今が最後でございます。どうかご赦免いただき、黄泉(「冥土」)に心配なく参りたいと存じ上げます。」

と申すと、義経は

「もとよりお前をずっと勘当するつもりなどない。ただ一時申しただけのことぞ」

と申され、涙に咽べば、源三(江田広基)はとても嬉しそうにうなずきました。

鷲尾七郎(鷲尾義久)も近くにいましたので、

「しっかりしろ源三よ、弓矢とるものが矢一つで死んでどうする。故郷へは何事も知らせんぞ」

と言いましたが、源三(江田広基)は返事をしませんでした。鷲尾が再び

「お前が枕にしておるのは君(源義経)のお膝だぞ」

というと、源三は

「お膝の上で死ぬるのであれば、何事も思い残すことはありませんが、この春頃、親であるものが、信濃へ下った折、『何とかして、冬頃には戻ってこいよ』と申したので『分かりました』と申してきましたが、下人(「召使い」)が虚しくなった遺骸を持って帰り、母に見せたなら、悲しむことであろうことは、罪深く思えます。それというのも君(源義経)が都におられる間は、ここに留まり常のこのように命をお受けしたかったからです」

と申せば、義経は

「心配するな、常々命ずるぞ」

と申したので、源三(江田広基)はそれは嬉しそうに涙を流しました。限りと思えたので、鷲尾が近づいて念仏を勧めました。源三(江田広基)は大きな声で念仏を唱え、義経の膝の上で、25歳で亡くなりました。